

労働研究とオーラルヒストリー

梅崎 修

- 1 オーラルヒストリー経験を語る意味
- 2 先行調査との出会い
- 3 私が参加したオーラルヒストリー
- 4 経験から学んだ調査方法
- 5 調査者と利用者のネットワーク

1 オーラルヒストリー経験を語る意味

本稿の目的は、労働分野におけるオーラルヒストリーの収集・整理状況を報告し、この分野におけるオーラルヒストリーの利用可能性を検討することである。

オーラルヒストリーは古くて新しい手法である。オーラルヒストリーという言葉が研究者の間で普及する前から、史談、証言記録、聞き書きという呼び名で数々のオーラルヒストリーが行われてきたことを理解すれば⁽¹⁾、オーラルヒストリーは古い手法と呼ぶべきである。しかし、歴史研究における文書中心主義の偏りが指摘され、オーラルヒストリーによって新しい研究成果が生み出される可能性に期待すれば、この古くからの手法を新しい手法として再評価する意義はあると言えよう。オーラルヒストリーという研究手法が関心を集めている現在、過去に行われたオーラルヒストリーを収集・整理し、またオーラルヒストリーの手法を紹介し（できればオーラルヒストリーの調査者を増やし）、なおかつ史料としてのオーラルヒストリーの利用可能性を検討することは貴重な試みであろう。

ところが、かりに人事労務管理史と労働史の分野に絞ったとしても、オーラルヒストリー史料を収集・整理することは難しい。労働研究者が聴き手となり、労務担当者や労働組合リーダーが語り手となったオーラルヒストリーは、ある程度把握できるのであるが、それ以外にも労働研究において利用できるオーラルヒストリーは多い。ジャーナリストによるオーラルヒストリーもあり、他分野の研究者によるオーラルヒストリーもある。たとえば、経営史研究者が企業家に対して行ったオーラルヒストリーにも労使関係についての証言が含まれており、政治史研究者による政治家や官僚

(1) オーラルヒストリーの歴史に関しては、Thompson (2000, 2003) や伊藤 (2007) が詳しい。

に対するオーラルヒストリーにも労働政策の証言が発見できる。人事労務管理史や労働史のオーラルヒストリーを紹介するには、あらゆる種類のオーラルヒストリーを集め、その内容を検索しながら史料整理を行う必要がある。

さらに、そもそも公開されていないオーラルヒストリーが多いことも予想される。オーラルヒストリーの方法に関しては後で述べるが、オーラルヒストリーはヒアリングを実施すること以上にその記録を公開することに手間がかかる。さらに公開されたとしても、その公開の範囲には限界があるので、必要なオーラルヒストリーを探すことは難しいのである。

以上要するに、オーラルヒストリーは研究者の関心を集めながらもその利用に関しては未整備であるといえる。伊藤（2007）や吉田（2007）が指摘しているように、未来のオーラルヒストリー利用者のためにも、オーラルヒストリーのデータベース化や情報センター設立が求められている。

そもそもオーラルヒストリーには、その利用を希望する研究者は多くても史料を作成する調査者が少ないという根本的な問題もある。史料としてのオーラルヒストリーにいくら関心が集まろうが、調査自体が増えなければ、オーラルヒストリーの発展はありえない。

もちろん、オーラルヒストリー調査を行ってみたいと考えている潜在的調査者は多いと思われる。しかし、オーラルヒストリーの手法はその他の社会調査手法と比べても分かり難いという印象があるらしい。たしかにこの研究はマニュアル化し難い調査手法であるが、調査手法の習得をO.J.T.だけに頼る必要もなく、ある部分に関してはマニュアル化が十分可能である。オーラルヒストリーをはじめの人には、失敗を含めた経験こそが役に立つと私は思う。これからはマニュアルや経験談が広く研究者の間で共有されるべきである。

オーラルヒストリーの発展は、個人プレーではなく連携プレーができるかどうかにかかっている。歴史の実証に取り組む我々の前には、たくさんの語り手が隠れているのだが、その対となるべき聴き手が少ないのである。いまだ未整理で埋もれている史料を繋ぎ合わせ、誰が何を語っていないのか、そして新たに何を聞くべきなのかを調査者間で共有する必要がある。そのためには、個人が行っているオーラルヒストリーを公開する必要がある。

私は、2000年から主に人事労務管理史と労働史の分野でオーラルヒストリー調査を開始し、試行錯誤を続けながら現在も調査を続けている。今まで私が実施してきたオーラルヒストリーの中には商業出版できたものもあるが、そのほとんどは100部程度の印刷物にただけであり、その一部は資金的な限界もあって未公開のままである。

はじめに、本原稿の依頼を受けた際、私の知識と経験では人事労務管理史と労働史におけるオーラルヒストリーを網羅的に報告することはできないと考えた。また、この場で自分の経験談を書くのは恥ずかしいという思いもあったのだが、オーラルヒストリー研究の現状を思うと、私の経験を語ることに小さな意義があると考え直した。以下に記したのは、個人的なオーラルヒストリー経験の記録である。私は、この試作論文がオーラルヒストリーに関心がある人たちと繋がることを期待している。

2 先行調査との出会い

先述したように、私がオーラルヒストリーを開始したのは2000年からである。オーラルヒストリーに取り組む前に参考となった労働分野のオーラルヒストリーは、大原社会問題研究所と日本労働研究機構（現労働政策研修・研究機構）で行われた調査であった。2000年の時点では、『大原社会問題研究所雑誌』や大原社会問題研究所編の『証言 産別会議の誕生』（総合労働研究所、1996年）と『証言 産別会議の運動』（御茶の水書房、2000年）で公開されているオーラルヒストリーを読むことができた。なお、その後、『証言 占領期の左翼メディア』（御茶の水書房、2005年）が刊行された。

大原社会問題研究所が行ったオーラルヒストリーに関しては、ご自身も聴き手として参加されていた吉田健二氏が詳しい紹介を行っている。吉田（2007）では、公開されたオーラルヒストリー史料の紹介はもちろん、調査の運営から未公開オーラルヒストリーや文書史料との関連までが説明されている。これから労働関係のオーラルヒストリーを利用したい研究者にとって貴重な報告と言えよう。

他方、日本労働研究機構のオーラルヒストリーに関しては、1992年から高梨昌氏を中心として戦後労働組合運動の証言研究会が組織化されていた。しかし、2000年の時点では『戦後労働組合運動の歴史－分裂と統一－「太田薫元総評議長」証言』（労働政策研修・研究機構、1999年）が公開されていただけで、他のオーラルヒストリーは研究所の非公開内部史料として保管されていた。

私は、自分自身が労働関係のオーラルヒストリーをはじめするためにもこの調査の経緯を知る必要性を感じ、高梨昌氏に対してヒアリングを行い、未公開史料を読む許可をいただいた（「戦後労働組合運動の証言研究会」の歴史－高梨昌氏に聞く－」（『オーラルヒストリー6』政策研究大学院大学、2002年）⁽²⁾）。公開されていない、もしくは未整理の史料に関して、その入手の経緯や史料の読み方を聞いておくことも貴重なオーラルヒストリーなのである。なお、その後2003年に『戦後労働組合運動の歴史－分裂と統一第1～5集』が外部の研究者にも公開されている⁽³⁾。今後、労働組合運動史の分野で活用されるべき第一級の史料である。

以上、2つの史料群は組織的に行われた大規模オーラルヒストリー・プロジェクトの成果であるが、それ以外にも労働分野ではオーラルヒストリーが行われている。私は、不十分ながらこの分野におけるオーラルヒストリーの収集を続けてきた。続けてそれらを紹介しよう。

まず、個人研究者が行った代表的なオーラルヒストリーとして、竹前栄治『証言日本占領史－GHQ労働課の群像』（岩波書店、1983年）と河西宏祐『聞書 電産の群像』（平原社、1992）があげられる。竹前氏と河西氏は、これらのオーラルヒストリーを活用し、竹前（1982）や河西（2001、2007）などの研究書を完成させている。

また、高梨昌編『戦後労働組合運動史への「証言」』（日本労働研究機構、1998年）は、高梨氏が

(2) ヒアリング終了後、高梨昌氏には研究会とシンポジウムでの発表を依頼し、ご快諾いただいた。高梨報告の内容は、伊藤隆編『日本近代史料情報機関設立の総括的かつ細目に関する研究』（平成13～14年度科学研究費補助金【基盤研究（B）】研究成果報告2003年）とC.O.Eオーラル政策研究プロジェクト『21世紀のオーラルヒストリー－政策研究の視点から－』（政策研究大学院大学、2003年）で読むことができる。

(3) 高梨氏の発言では、ナショナルセンターの活動に続いて1995年から1998年まで産業別労働組合の証言を集める研究が行われているが、その公開に関しては確認できなかった。公開が待たれる。

信州大学勤務時に組織化した「戦後日本労働運動史基礎資料の収集整理」(文部省総合研究(A))の成果である。この冊子には、三戸信人(新産別顧問)、飼手真吾(元労働省労働組合課長)、古賀専(造船重機労連顧問)の証言が収められている。なお、このプロジェクトは、日本生産性本部主催の研究講座「戦後労働組合運動の軌跡と転換期を支えた指導者」に発展し、その内容は、高梨昌編『証言戦後労働組合運動史』(東洋経済新報社、1985年)としてまとめられた。この本には、細谷松太、古賀専、宝樹文彦、太田薫、和田春生、天池清次、宮田義二、瀬戸一郎の証言が収録されている。

次に、伊藤隆監修『現代史を語る(3)桂梶-内政史研究会談話速記録』(現代史料出版、2003年)を紹介しよう。この記録は、内政史研究会が1973年に行ったオーラルヒストリーを刊行したものである⁽⁴⁾。戦前から戦後につづく労務管理史の貴重な証言である。内政史研究会談話速記録は国会図書館憲政資料室で閲覧できるが、今後利用者が増えるように少しでも商業出版として公開されることを期待したい。

さらに、人事担当者に対するオーラルヒストリーとしては、福岡道生『人を活かす!-現場からの経営労務史』(日経連出版部、2002年)をあげることができる。新日鉄の人事担当者の証言であり、作業長制度や職務給導入などについて当時の状況を知ることができる。

労働省のオーラルヒストリーもある。『赤松良子オーラルヒストリー』(C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト・政策研究大学院大学、2005年)は労働政策の歴史証言である。1985年に成立した男女雇用機会均等法の成立過程に関する証言が収録されている。

鳥栖市誌編纂委員会・中村尚史編『鳥栖市誌研究編 第5集 汽笛の記憶-鉄道員のオーラルヒストリー』(鳥栖市、2006年)は、書名だけからは労働分野のオーラルヒストリーとは気付かないが、鉄道員という現場労働者の証言が収められたオーラルヒストリーである。この史料を読むと国鉄の現場労務管理の実態が理解できる。労働者の生の声を残すというこの種のオーラルヒストリーは社会史や民俗誌の分野において膨大な蓄積がある。たとえば、村上安正『足尾に生きたひとびと』(随想社、2000年)などをあげることができる。現場労働者へのオーラルヒストリーは今後発展すべき調査対象であろう。

その他、雑誌連載という形で実施されたオーラルヒストリーもある。毎日新聞社の『エコノミスト』誌で連載された4つの証言シリーズは、雑誌上での公開という分量的限界を持ちながらも多くの語り手が収められたオーラルヒストリーである。ここでは、労働史に関係する語り手を抜き出しておく。加藤勘十、紺野与次郎、伊井弥四郎、高野実、西尾末広、片山哲(以上、安藤良雄編著『昭和経済史への証言 上中下』(毎日新聞社、1965-1966年)収録)、志賀義雄、中山伊知郎、前田一、郷司浩平、加藤勘十・加藤シヅエ(以上、中村隆英・伊藤隆・原朗編『現代史を創る人びと1~4』(毎日新聞社、1971-1972年)収録)、原茂(以上、エコノミスト編集部編『戦後産業史への証言 1~5』(毎日新聞社、1977-1979年)収録)、小松廣、郷司浩平、蛭谷武弘、宮田義二、佐藤芳夫(以上、エコノミスト編集部編『高度経済成長への証言 上・下』(日本経済評論社、1999年)収録)である。

(4) 内政史研究会に関しては伊藤(2000)を参照。

続けて、大学紀要などの研究雑誌に載せられたオーラルヒストリーを紹介したい。ただし、ここにあげたオーラルヒストリーの一覧は不完全であることをあらかじめ断っておきたい。書籍についても同じことは言えるのだが、題名や副題にオーラルヒストリー、もしくは証言や聞き書きなどのキーワードが書いてあれば探索も容易であるが、実際はその原稿がオーラルヒストリーであるかどうかは雑誌を取り寄せて読んでみなければわからないのである。探索の続行は今後の課題であるが、現時点で私が発見できた労働分野のオーラルヒストリーを以下にあげておく。村上義幸・阿部武司・東口聡「戦後綿紡績における労務管理（1）～（5）」（『大阪大学経済学』第51巻第1, 2, 3号2001年, 4号2002年, 第52巻第1号2002年）、滝田実「回想：ゼンセン同盟・黎明期の頃上・下」（『日本紡績月報』第534-535号, 1991年）、片岡衛「戦後の紡績における労務管理・教育問題上・下」（『日本紡績月報』第553-554号, 1993年）、戦後労働運動史研究会編「戦後労働運動の「神話」を見直す第1～5回（増山太助, 鈴木市蔵, 宝樹文彦, 沢田広収録）」（『世界』第657～661号, 1999年）、田中博秀「日本の雇用慣行を築いた人達－その一～その三（小松廣（新日鐵）, 山本恵明（トヨタ自動車工業）, 田中慎一郎（十條製紙）収録）」（『日本労働研究雑誌』第275,276,277,280,281,282,289,290号, 1987-1988年）である。

ところで、研究者の回顧録も労働分野のオーラルヒストリーに加えるべきではないだろうか。語り手の幅広い社会的活動をふまえれば、有沢廣巳『戦後経済を語る－昭和史への証言』（東京大学出版会, 1989年）や大河内一男『社会政策四十年－追憶と意見』（東京大学出版会, 1970年）などは、学問論としてだけでなく労働分野の史料としても価値がある。

以上紹介してきたのは、研究者が行ったオーラルヒストリーである。その他、ジャーナリストが聴き手となったオーラルヒストリーも存在する。まず、聞き書き形式の回顧録としては、宝樹文彦『証言 戦後労働運動史』（東海大学出版会, 2003年）や宮本太郎『回想の読売争議』（新日本出版社, 1994年）があげられる。回顧録は、聞き書き形式以外にも自らが筆をとった自伝形式や仲間の文章を集めた文集形式のものも多い。研究史料としてこれらを利用する立場から言うと、他の形式と比べて聞き書きの史料的价值は高いように思う。

さらに、労働組合運動のオーラルヒストリーとして師岡武男・仲衛編『証言構成 戦後労働運動史』（戦後労働運動史頒布会, 1991年）と総評新聞社編『証言 総評労働運動』（総評センター, 1990）が、人事労務管理のオーラルヒストリーとして矢加部勝美編『経営リーダーの昭和労務史』（日経連広報部, 1990）があげられる。ただし、これらのオーラルヒストリーは出版を前提として行われているので、証言の中身がかなり編集されている可能性が高い⁽⁵⁾。一人当たりの文字数も決められているため、多くの証言が削られていると予測される。

最後に、オーラルヒストリーの多様な実施方法を紹介しよう。河西宏祐編『戦後日本の争議と人間－千葉大学教養学部の教育実践記録』（日本評論社, 1986年）と河西宏祐編『戦後史とライブヒストリー－千葉大学教養学部の教育実践記録』（日本評論社, 1992年）は、河西氏が大学の授業で行ったオーラルヒストリーである。オーラルヒストリーを授業で使う場合、もちろん学生の教育が

(5) 『証言 総評労働運動』は『総評新聞』で、『経営リーダーの昭和労務史』は『日経連タイムズ』で連載されたものをまとめたものである。1回の連載で一人の証言なので、聞いている人数は多いが情報量は少ない。

第一の目的なのだが、調査としてはヒアリングが授業時間内に限定され、講演形式では学生が質問者になるという限界はある。ただし、この二つのオーラルヒストリーは、事前準備の確かさもあって史料的価値も確保している。

また、中央労働委員会事務局編『労働委員会の三十年』（全国労働委員会連絡協議会、1976年）と日本労働協会編『戦後労働立法と労働運動 上・下』（日本労働協会、1960年）は、座談という形で残されたオーラルヒストリーである。労働委員会や労働法制に関する資料的価値が高いので、ここに記しておく。座談の記録も一種のオーラルヒストリーであると考え、この形式で残された記録は膨大であると予測されるので、座談の収集も今後の大きな課題でもある。

3 私が参加したオーラルヒストリー

私がオーラルヒストリーに参加したきっかけは、2000年に政策研究大学院大学で開始されたC.O.Eオーラル・政策研究プロジェクト「オーラルメソッドによる政策研究の基礎的研究」である。この5年間のプロジェクトにおいて主に経済・労働分野のオーラルヒストリーに参加した。180人弱を対象に1200回、およそ2400時間のヒアリングが実施された戦後最大のオーラルヒストリー・プロジェクトの全貌に関しては、研究代表者伊藤隆編『オーラルメソッドによる政策の基礎研究【研究成果報告書】』（政策研究大学院大学、2005年）が詳しい。また、収集された個々のオーラルヒストリーの概要は『研究代表者 伊藤隆編『オーラルメソッドによる政策の基礎研究、【別冊2概要集】』（政策研究大学院大学、2005年）で読むことができる。

さらに私は、2000年以降、C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクトの他にも別のオーラルヒストリー・プロジェクトに参加し続けている⁽⁶⁾。オーラルヒストリーをプロジェクト別に紹介するやり方もあるが、参加したプロジェクトの数も多く、なおかつそれぞれのオーラルヒストリーが重なっているので読者には分かり難いであろう。そこで本稿では、調査対象別にオーラルヒストリーを並べて紹介したい（表1参照）。

(1) 労働組合運動のオーラルヒストリー

第1に、労働組合運動のオーラルヒストリーがあげられる。産業別労働組合やナショナルセンターにおけるユニオンリーダー経験者の証言である。C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクトのオーラルヒストリーでは、伊藤隆氏をメインインタビュアーとして天池清次、宇佐美忠信、金杉秀信、宝樹文彦、山岸章各氏のオーラルヒストリーが行われた。また、猪木武徳氏をメインインタビュアーとして宮田義二氏と高畑敬一氏のオーラルヒストリーが行われた。私は、これらのオーラルヒストリーにサブインタビュアーとして参加した。

一方、早矢仕不二夫氏のオーラルヒストリーは、天池清次氏のオーラルヒストリー終了後、元総

(6) 基盤研究 (A)「口述記録と文書記録を基礎とした現代日本の政策過程と政策史研究の再構築（伊藤隆）」と若手助成 (B)「日本の生産運動における労使間・労働組合間の〈対立〉と〈協調〉（梅崎修）」などの助成を受けて進められた。

表1 私に参加した労働分野のオーラルヒストリー

オーラルヒストリー	役職など	聞き手
(1) 労働組合運動のオーラルヒストリー		
天池清次 著『労働運動の証言』 (財)日本労働会館, 2002 (全12回)	元同盟会長、全金同盟会長	伊藤隆、黒沢博道、梅崎修
早矢仕不二夫 著『ほんとの自分を生きる』 青史出版, 2004 (全9回)	元東京同盟会長	梅崎修、南雲智映、島西智輝
『東京金属・統一労働協約オーラルヒストリー』 慶應義塾大学産業研究所, 2007 (全6回)	元全金同盟労働組合リーダー・金属機械企業経営者	梅崎修、南雲智映、島西智輝
宇佐美忠信 著『志に生きる』 (財)富士社会教育センター, 2003 (全9回)	元同盟会長、全織同盟会長	伊藤隆、黒沢博道、禿あや美、梅崎修
『宝樹文彦オーラルヒストリー』 政策研究大学院大学, 2005 (全17回)	元全通委員長	伊藤隆、手塚和彰、有馬学、梅崎修、島西智輝
『宮田義二オーラルヒストリー』 政策研究大学院大学, 2003 (全9回)	元IMJC会長・元鉄鋼労連委員長	猪木武徳、黒沢博道、禿あや美、梅崎修
『金杉秀信オーラルヒストリー』 政策研究大学院大学, 2004 (全10回)	元造船重機労連委員長	伊藤隆、黒沢博道、梅崎修、南雲智映
『高畑敬一オーラルヒストリー』 政策研究大学院大学, 2004 (全7回)	元松下電機労連委員長	猪木武徳、禿あや美、岩田憲治、梅崎修
堅山利文 著『遠交近攻』 東海大学出版会, 2006 (全12回)	元民間連合会長	梅崎修、南雲智映、島西智輝
『山岸章オーラルヒストリー』 政策研究大学院大学, 2005 (全10回)	元連合会長	伊藤隆、梅崎修、南雲智映
『伊藤祐偵オーラルヒストリー』 慶應義塾大学産業研究所, 2006 (全8回)	元造船重機労連委員長	梅崎修、南雲智映
(2) 鉄鋼産業・労使関係のオーラルヒストリー		
『奥田健二オーラルヒストリー』 政策研究大学院大学, 2004 (全11回)	元日本鋼管人事担当者	尾高煌之助、梅崎修、橋野知子
『後藤辰夫オーラルヒストリー』 政策研究大学院大学, 2004 (全10回)	元日本鋼管組合リーダー	尾高煌之助、梅崎修、橋野知子、井上雅雄、青木宏之
『國本稔オーラルヒストリー』 政策研究大学院大学, 2004 (全2回)	元日本鋼管組合リーダー	尾高煌之助、梅崎修、青木宏之
『丹野昌助オーラルヒストリー』 政策研究大学院大学, 2004 (全2回)	元日本鋼管組合リーダー	尾高煌之助、梅崎修、青木宏之
『西川忠オーラルヒストリー』 政策研究大学院大学, 2005 (全3回)	元日本鋼管労務担当者	尾高煌之助、梅崎修、青木宏之
『岩崎馨オーラルヒストリー』 政策研究大学院大学, 2005年(全2回)	元日本鋼管組合リーダー	尾高煌之助、梅崎修、青木宏之
『鉄鋼労連賃金政策オーラルヒストリー』(全4回)	鉄鋼労連ユニオンリーダー	梅崎修、青木宏之、杉山裕
『鉄鋼賃金政策オーラルヒストリー』(継続中)	元鉄鋼企業人事担当者、ユニオンリーダー	梅崎修、杉山裕
『釜石製鉄所オーラルヒストリー』(継続中)	釜石製鉄所人事担当者、現場作業員	中村尚史、仁田道夫、梅崎修、青木宏之
『日本鋼管技術者オーラルヒストリー』 政策研究大学院大学, 2005 (全3回)	元日本鋼管技術者	尾高煌之助、梅崎修、青木宏之
(3) 生産性運動のオーラルヒストリー		
『生産性運動オーラルヒストリー(労働部編)』 第1～3巻 政策研究大学院大学, 2003 (全17回)	日本生産性本部・労働部元職員	梅崎修、藤村博之、石田光男
『生産性運動オーラルヒストリー(国際部編)』 上巻下巻 政策研究大学院大学, 2003 (全14回)	日本生産性本部・国際部元職員	梅崎修、森直子、柴田 裕通
『生産性運動オーラルヒストリー(経営開発部編)』 政策研究大学院大学, 2005 (全5回)	日本生産性本部・経営開発部元職員	梅崎修、森直子、島西智輝
『生産性運動オーラルヒストリー(労働視察団編)』 梅崎研究室所蔵 (全5回)	日本生産性本部・海外視察団参加者など	梅崎修、森直子、島西智輝、戸田裕美子
『村杉康男オーラルヒストリー』 政策研究大学院大学, 2003 (全1回)	元味の素労働組合リーダー	梅崎修、藤村博之
『生産性運動のオーラルヒストリー、 一河鍋 巖氏 (元労働部職員)の仕事』 『生涯教育社会とキャリアデザイン』 第1号, 2003年 (全1回)	日本生産性本部・労働部元職員	梅崎修
『生産性運動のオーラルヒストリー、 一前田昭夫氏と中條藏實氏の仕事』 『法政大学キャリアデザイン学部紀要』 第2号, 2005年 (全1回)	日本生産性本部・労働部元職員	梅崎修
『牛尾治朗オーラルヒストリー』(全2回)	ウシオ電機会長	梅崎修、森直子、島西智輝、戸田裕美子
『三田商学研究』掲載予定		
『塩川正十郎オーラルヒストリー』(全1回)	元財務大臣・元衆議院議員	梅崎修、森直子、島西智輝
『立教経済学研究』(第61巻第2号)		

(4) 人事労務管理のオーラルヒストリー		
『兵頭傳オーラルヒストリー』 政策研究大学院大学, 2003 (全9回)	元住友重機人事担当者	藤村博之、梅崎修、南雲智映
『楠田丘オーラルヒストリー』政策研究 大学院大学, 2003 (全8回) 楠田丘著 石田光男監修 『賃金とは何か』中央経済社	賃金コンサルタント	石田光男、梅崎修
『職能資格制度関係者オーラルヒストリー』 (全3回) (未公開)	元人事部職員	梅崎修
『能力主義管理40年－日経連能力主義管理 オーラルヒストリー研究会報告書』 慶應義塾大学産業研究所 (全8回)	日経連職員・委員	八代充史、清家篤、牛島利明、戎野淑子、 梅崎修、南雲智映、島西智輝
(5) 労働史史料オーラルヒストリー		
労働史史料オーラルヒストリー (全5回)	労働史史料の関係者	研究会形式
『「戦後労働組合運動の証言研究会」の歴史-高梨昌氏に聞く』 『オーラルヒストリー6』政策研究大学 院大学, 2002 (全1回)	元日本労働研究機構会長	梅崎修、青木宏之

同盟のユニオンリーダーの依頼を受けて開始された。天池氏がナショナルセンターや産別労働組合(全金同盟)の運動について語ったのに対して、早矢仕氏は東京と千葉という一地方における労働組合運動について語っている。このオーラルヒストリーは、南雲智映氏と島西智輝氏と一緒にヒアリングを行い、早矢仕不二夫著作刊行委員会によってまとめられた。さらにその後、1970年に東京金属労働組合において締結された地域別統一労働協約に焦点を当て、その成立に向けて早矢仕氏と一緒に活動されたユニオンリーダーや統一協約に参加した個別企業の労使にヒアリングを行った。全国組織、産別労働組合、個別企業労使の証言を集めた時点で、我々調査チームは、南雲智映・島西智輝・梅崎修「地域別統一労働協約締結に至る労使交渉過程(1961~1970) - 東京金属産業労働組合の事例 - 『日本労働研究雑誌』No.548 特別号(2006年)を作成した。

豎山利文氏と伊藤祐偵氏は、慶應義塾大学産業研究所のプロジェクトとして開始されたものである。前者は南雲氏と島西氏と、後者は南雲氏と一緒にヒアリングを行った⁽⁷⁾。これらのオーラルヒストリーから電機産業と造船産業の労使関係が理解できる。

以上、労働組合リーダーのオーラルヒストリーは、次にあげる鉄鋼産業・労使関係のオーラルヒストリーの一部と併せて戦後労働組合運動を把握できる貴重な史料である。日本労働研究機構(証言研究会)で行われたオーラルヒストリーと比べると対象者の数は少ないが、生まれから現在までのライフ・オーラルヒストリーなので、一人当たりのヒアリング回数は多い(宝樹氏に関しては、全17回である)。情報の密度は高いといえよう。これらの記録をクロスチェックしながら読み解くと、連合成立に至るナショナルセンターの統合と分裂や、全国組織と産別労働組合と企業別労働組合の間の摩擦と協力関係などが分析可能になる。この史料の利用者が待たれる。

(2) 鉄鋼産業・労使関係のオーラルヒストリー

第2に、鉄鋼産業・労使関係のオーラルヒストリーがあげられる。このオーラルヒストリーは、

(7) 2003年度法政大学特別研究助成金「東京全金同盟における統一労働協約成立までの過程－オーラルヒストリーによる接近－(梅崎修)」, 2003年度鈴浜学術財団助成「日本企業における生産性運動の普及過程－オーラルヒストリーによる接近－(梅崎修)」によって実施された。

C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクトの下、尾高煌之助氏をメインインタビュアーとしてはじめられた。最初に日本鋼管の人事労務担当者であった奥田健二氏のオーラルヒストリーを行い、その後、労働組合側の意見を把握する必要性を感じ、後藤辰夫、國本稔、丹野昌助、岩崎馨各氏のヒアリングを続けた。もちろん、これらのオーラルヒストリーは労働組合運動の史料としても利用できる。くわえて、奥田氏の後輩人事担当者である西川忠氏のヒアリングを行い、奥田氏とは別時期の人事労務管理の証言も収集した。さらに、C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクトとは別に、日本鋼管における技術者のオーラルヒストリーも実施し、生産管理に関する証言も集めた。

このように一企業であっても異なる立場、異なる時期から証言を収集することで、企業の歴史が立体的に把握できる。なお、一企業を超えた鉄鋼労働組合運動の全体動向に関しては、先述した宮田義二オーラルヒストリーも役立つであろう。

続けて私は、法政大学比較経済研究所の小プロジェクト「高度成長期日本鉄鋼産業における海外人事制度の導入過程 - オーラルヒストリーメソッドによる接近」（2005～2006）を企画し、鉄鋼労連の千葉利雄氏と石塚拓郎氏のヒアリングを開始した。産業別労働組合と企業別労働組合の対立と協調は、双方の証言を集めることで把握できる。賃金政策をめぐる議論は、梅崎修・青木宏之・杉山裕「鉄鋼大手企業における賃金プロファイルの接近：1960, 70年代—内部労働市場と産別賃金交渉—」『日本労働研究雑誌』No.548 特別号（2007年）としてまとめた。現在も、関西の鉄鋼企業（住友金属と神戸製鋼）のヒアリングを行いながら企業間の意見の違いを調べている。

その他、現在進行中のオーラルヒストリーとして東京大学社会科学研究所の希望学プロジェクトがある。このプロジェクトの様々な調査が実施されているが、そのなかでも中村尚史氏を中心に新日鐵釜石製鉄所の元労働者のオーラルヒストリーが行われており⁽⁸⁾、私も聴き手としてこの調査に参加している。釜石製鉄所の縮小過程を労働者の視座から把握する試みである。

(3) 生産性運動のオーラルヒストリー

第3に、生産性運動のオーラルヒストリーがあげられる。生産性運動のオーラルヒストリーは、個人史でも個別テーマ史でもなく、組織活動史を調査したオーラルヒストリーである。

生産性運動とは、1948年にマーシャル・プラン（欧州復興計画）の受入機関として設立された欧州経済協力機構（OECE）がアメリカ政府の要請を受けて始めたものである。日本生産性本部は経済同友会の主導で1955年に設立されており、労使協調・技術進歩によって失業を防止し、経営者、労働者、消費者間の公正配分を運動の原則とした。日本生産性本部に対しては労働組合内部でも賛否両論が生まれた。設立当初、総同盟（全日本労働総同盟）は条件付参加を表明したが、全労（全日本労働組合会議）の海員組合やゼンセン同盟は遅れて参加し、総評（日本労働組合総評議会）は反対を表明した。すなわち、生産性運動は、労使の間はもちろんであるが、労労の間もそれぞれの立場から争う議題であった。

私が生産性運動のオーラルヒストリーを企画した時、生産性運動に関する実証的研究は少なかつ

(8) 萌芽研究「近現代日本における「希望」の社会的位相—岩手県釜石地方を事例として（中村尚史）」の助成を受けて実施された。

た。これまでの研究は日本生産性本部から出された文書を使用していた。『生産性運動30年史』、『日本生産性本部・事業報告書』、『労使関係白書』（労使協議制常任委員会 刊行）、『賃金白書』（賃金決定機構委員会 刊行）、『生産性新聞』などの文書があげられるが、これだけでは生産性運動の全体像を把握できない。オーラルヒストリーによる掘り起こしが必要であった。

はじめに、労使関係を担当していた労働部に絞ってヒアリング調査を開始した。歴代部長、課長のリストを入手し、その中からヒアリング候補者を選んだ。組織を対象としたオーラルヒストリーの場合、語り手が職員および元職員になるので、著作などを持っている経営者や労働組合リーダーとは異なり、語り手を見つける作業が必要である。また、組織内では異動があるので、労働部に配属されていた期間を正確に把握しなければならない。つまり、誰に、何時のことを聞くのかを慎重に計画する必要がある。現役職員の方からヒアリングをはじめて徐々にOBへも対象を広げていった。最終的に、7名の元労働部職員の方に依頼し、一人あたり1～3回のヒアリング（合計17回）を実施し、『生産性運動オーラルヒストリー〈労働部編〉上中下』をまとめた。なお、労働部・元職員だけでなく、関係者の方にもヒアリングを行っている。生産性青年教員の元受講生は元職員のヒアリングに同席してもらい、労働部の支援によって労使協議制を取り入れた会社の元労働組合リーダー（村杉氏）のヒアリングも行った。また、それ以外にも労働組合運動のオーラルヒストリー、鉄鋼産業・労使関係のオーラルヒストリー、および人事労務管理のオーラルヒストリーを実施する際にも、私は生産性運動に関する質問をしている。

組織オーラルヒストリーに関して注意すべきは、紹介という形でヒアリング対象者を広げていくので、組織内でも一部の人が語り手に選ばれてしまう可能性が高いことである。すなわち、部門内グループの存在である。もし、一グループだけをヒアリングしていれば、組織内意思決定の分析はできるはずがない。労働部調査では、既にお亡くなりになっていた元労働部部長のご自宅にお訪ねし、奥様のお話を聞く機会を設けた際、元労働部職員を紹介していただいた。紹介経路の変更もランダムサンプリングのためには必要である。別経路の補足オーラルヒストリーは、「生産性運動のオーラルヒストリー、一河鍋 巖氏（元労働部職員）の仕事―』『生涯教育社会とキャリアデザイン』第1号（2003年）、「生産性運動のオーラルヒストリー、一前田昭夫氏と中條藏實氏の仕事―』『法政大学キャリアデザイン学部紀要』第2号（2005年）にまとめた。

労働部に続けて国際部についても同様のやり方でヒアリングを実施した。語り手5名、合計14回の証言は、『生産性運動オーラルヒストリー〈国際部編〉上下』としてまとめた。国際部のオーラルヒストリーでは、国際部の主要事業であった海外視察団について詳しく聞いた。また、内部文書であった視察団参加者名簿をお借りしてデータベースを作成し、参加者の量的な把握を行った。ヒアリング対象者もその名簿の中から選び、労働視察団参加者、塩川正十郎氏、牛尾治朗氏の証言が得られた⁹⁾。視察団の量的分析と運営者と参加者に対するオーラルヒストリー分析は、森直子・島西智輝・梅崎修「日本生産性本部による海外視察団の運営と効果－海外視察体験の意味－」『企業家研究フォーラム』第4号（2007年）としてまとめた。

(9) 2003年度 松下国際財団研究助成「トップマネジメントによる海外経営技法の導入（梅崎修）」、2005年度 企業家研究フォーラム第3回研究助成「企業家の海外視察体験（梅崎修）」によって実現された。

最後に、経営開発部に関しても語り手5名、合計5回のヒアリングを行い、経営側に向けた生産性本部の活動を把握した。労働部、国際部、経営開発部という組織内の三部門をヒアリングすることで、日本生産性本部の主要事業を押さえたといえよう。これらの証言を比較検討することで、部門を超えた意思決定を分析できる。日本生産性本部では、収益事業をめぐる部門間対立も存在しているため、異なる立場の証言をクロスチェックするというオーラルヒストリー分析において欠かすことができない作業が確保できる。

（4）人事労務管理のオーラルヒストリー

人事労務管理のオーラルヒストリーは、生産性運動のオーラルヒストリーに続けて開始された。はじめに、日本生産性本部の主要な委員会参加者をデータベース化し、そのリストの中から次の調査対象者を探した。

まず、兵藤傳氏は、労使協議制常任委員会の委員と委員長を歴任された人物である。また、もともと兵藤氏が人事部長を務めた住友重機械工業の労働組合は生産性運動反対の急先鋒であった総評全国金属の傘下であったが、氏は、その後生産性運動への協力体制を作り上げている。総評全国金属の脱退前後における生産性運動の反対から協力への転換を読み解く必要があった。現在のところ、生産性運動が開始される前、さらに総評設立以前の総同盟右派が力を持っていた時代の労使交渉を分析し、南雲智映・梅崎修「職員・工員身分差の撤廃に至る交渉過程－「経営協議会」史料（1945～1947年）の分析－」『日本労働研究雑誌』No.550（2007年）を作成した。今後は生産性運動をめぐる労働組合間が対立する時代を分析したい。

楠田丘氏は、賃金制度研究委員会の委員と委員長を歴任し、生産性本部が立ち上げた賃金管理士養成講座の講師として活躍された賃金コンサルタントである。楠田氏の大きな仕事は、職能資格制度と職能給の設計および普及である。賃金制度の設計に至る思考の軌跡や新制度導入に伴う運営上のノウハウはオーラルヒストリーだからこそ入手できる情報といえよう。くわえて私は、楠田氏の教えを受けた後輩賃金コンサルタントや同じ委員会で賃金制度について議論した人事担当者のヒアリングを実施した。残念ながら現在は未公開である。

一方、『能力主義管理40年－日経連能力主義管理 オーラルヒストリー研究会報告書』は、1960年代後半に日本経営者団体連盟で組織化された「能力主義管理研究会」の関係者6名（合計8回）に対して行われたオーラルヒストリーである。この調査プロジェクトは、慶應義塾大学産業研究所において清家篤氏と八代充史氏によって企画された。「能力主義管理研究会」は、1960年代後半に日経連内部で徐々に形成されていた職務給に代わる賃金思想を体現している。先行研究でも1970年以降の日本企業の賃金制度設計に大きな影響を与えたと主張されるが⁽¹⁰⁾、このオーラルヒストリーを使えばその詳細な議論を把握できる。

（5）労働史史料のオーラルヒストリー

研究会形式で続けているオーラルヒストリーに労働史史料に関するオーラルヒストリーがある。

(10) 代表的な研究として石田（1990）と鈴木（1994）などがあげられる。

労働史史料の収集・整理状況に詳しい方にヒアリングする研究会である。労働史史料の中には、既に整理されたものもあるが未整理の史料も多い。われわれがこれらの史料を利用する際、その入手の経緯などを理解しないと大きな解釈の間違いを起す可能性もある。労働史史料に関するオーラルヒストリーは、文書史料と一緒に利用される証言記録であろう。

表2 (6) その他のオーラルヒストリー

オーラルヒストリー	役職など	聴き手
『工業高校・高専オーラルヒストリー』(全2回) 未公開	元工業高校就職担当。元文部省大学局職員	梅崎修、妹尾渉
『守屋廉造オーラルヒストリー』政策研究大学院大学, 2003 (全6回)	陸軍士官学校卒業生	猪木武徳、梅崎修
『太田勇三郎オーラルヒストリー』政策研究大学院大学 (全4回)	海軍兵学校卒業生、元曙プレーキ副社長	尾高煌之助、橋野知子、梅崎修
『飯田耕作オーラルヒストリー』政策研究大学院大学, 2003 (全7回)	海軍兵学校卒業生、ベリタス社長	尾高煌之助、橋野知子、梅崎修
『宮本敏夫オーラルヒストリー』政策研究大学院大学, 2004 (全11回)	海軍兵学校卒業生、元ソニー取締役	尾高煌之助、橋野知子、天野倫文、禿あや美、梅崎修
『内田星美オーラルヒストリー』政策研究大学院大学, 2003 (全5回)	技術史家・東京経済大学名誉教授	尾高煌之助、橋野知子、梅崎修
『椎名敏夫オーラルヒストリー』政策研究大学院大学, 2003 (全7回)	日立精機技術者	尾高煌之助、橋野知子、梅崎修
『清家清オーラルヒストリー』政策研究大学院大学所蔵 (全6回)	建築家	尾高煌之助、尾高南、橋野知子、梅崎修
『村田昭オーラルヒストリー』政策研究大学院大学, 2004 (全12回)	村田製作所創業者	猪木武徳、梅崎修
『村田製作所オーラルヒストリー』政策研究大学院大学, 2005 (全2回)	村田製作所相談役、歴代人事部長	猪木武徳、梅崎修
『新谷恒彦オーラルヒストリー』政策研究大学院大学, 2005 (全3回)	イズ自動車・技術者	森直子、梅崎修、石原直紀
『巻島英雄オーラルヒストリー』法政大学イノベーションマネジメント研究センター, 2006 (全4回)	トヨタ販売	宇田川勝、四宮正親、梅崎修、生島淳

(6) その他のオーラルヒストリー

最後に、労働分野以外で私がかんがえたオーラルヒストリーも紹介しておく(表2参照)。経営者と技術者のオーラルヒストリーが多いが、労働研究でも利用できる証言が含まれている。

経営者の意見は、労使関係を理解するうえで不可欠である。また、技術者(とくに生産技術者)の証言は生産現場の変化をわれわれに伝えてくれる。生産現場が変われば、仕事の質も量も変化するのだから、技術から見た労働という視点は欠かすことができない。さらに教育機関についての証言も、日本企業の採用戦略を考えるためには役立つ。とくに工業教育の場合、学校教育と企業教育の接続という問題が重要である。

以上要するに、労働分野のオーラルヒストリーといっても人事担当者や労働組合リーダーに対するヒアリングだけでは偏った情報収集になってしまう。複数の立場から証言を集めたうえでのクロスチェックはオーラルヒストリーという手法には必須の作業といえる。

4 経験から学んだ調査方法

本章では、個人的な調査経験の中からつかんだオーラルヒストリーの特徴とその論点について議

論したい。オーラルヒストリーの進め方に関しては御厨（2002）が詳しい。調査依頼から事前準備を経て調査を行い、調査記録をまとめるまでの流れが説明されている。私も、以下のような順序で調査を行っている。

オーラルヒストリーの流れ

- ①ヒアリングの申込み
- ②事前下調べ（地図、社史、団体史、著作）
- ③個人年表作成（場合によっては質問表を作成する）
- ④月1回の頻度でヒアリング調査
- ⑤1回ごとに本人修正→直し
- ⑥ヒアリング終了
- ⑦第1回修正終了後、公開を前提とした再修正の確認（本人最終確認）
- ⑧編集（小見出し付け、付属資料、整文、校正）
- ⑨冊子印刷、公開
- ⑩保存（時限付き公開）

以上の流れの中で、下調べ、年表や質問表作成、修正・編集の方法はマニュアル化が可能であろう。またヒアリングの方法も、参加人数や録音機の使い方などをマニュアルとして教えることは容易である。

しかし、その一方でオーラルヒストリーにはO.J.T.によって身につける知識がある。以下では、O.J.T.でなければならない理由を三つあげる。

第一に、オーラルヒストリーの調査はコミュニケーション能力を最大限に活用するという特徴を持つ。アンケート調査でも対象者の質的情報を聞くことも多く、その調査表は質問し答えてもらうというコミュニケーションであるが、質問①→答え①という1回のコミュニケーションである。それゆえ、質問と答えの組み合わせをパターン化できる。たとえば、個人属性、意見、意識などに関する質問項目がマニュアル化されている。しかし、ヒアリング調査は反復するコミュニケーションである。質問①→答え①で止まらず、質問②→答え②→…と続いていく。当たり前のことであるが、その繰り返しのなかで「質問-答え」のパターンを捉えることが難しい。

授業でヒアリング調査のやり方を学生に教えると、「どのように質問すればよいか」と尋ねられる。アンケート調査ならば質問項目の作り方を説明すればよいが、ヒアリング調査の場合、質問の仕方を教えてもそこで終わらない。「もし相手が〇〇と答えて来たらどう質問すればよいか」という質問が続くのである。しかし、質問②は答え①を受けて行われるので、事前に答え①-質問②をパターン化することは不可能である。「もし相手が〇〇と答えて来たら…」という仮定は、それは可能性であればいくらかでも考えられるからである。相手の答えに対して臨機応変に質問するしかないという点がヒアリング調査のカンでありコツである。事前に相手の反応を予測しすぎれば、コミュニケーションはぎくしゃくしたものになる。

第二に、オーラルヒストリーは、他のヒアリング調査と比べて他人の過去、つまり記憶を聞くことの難しさを抱えている。現在の具体的な事実を聞くならば、それを話すか話さないかは情報公開

の範囲によって規定されている。その一方でオーラルヒストリーのように過去を聞くには、思い出してもらう工夫が必要である。さらに、純粹に記憶力の問題だけではなく、記憶する行為そのものに関係する問題もある。

過去の出来事を記憶し、現在それを語る時には、その出来事はランダムな事実の羅列ではなく、語り手の中で物語化されているのである。ここで言う物語化とは、歴史の実証研究において語り手によるバイアスである。しかし、このバイアスを取り除くことは、語り手の物語を批判することになるので、困難を伴う。語られる物語とは単なる嘘ではない。自らのアイデンティティーとなりうる“語り手本人にとっての真実”であり、その物語を批判することはアイデンティティーへの攻撃なのである。

現在を聞くように他人の過去を自由に聞けると考え、なおかつコンピューターから情報を取り出すように他人の記憶を取り出せると思っている人がたまにいるが、私はそのような人たちを密かにタイムマシン歴史学者（タイムマシンに乗って“過去の今”を簡単に取材できると思っている人）と呼んでいる。

記憶＝物語を如何に聞き取るかは、他人の語りたい物語が何であるかを理解しつつ、その語りを否定するのではなく、別の物語へとずらすように聞いていく必要がある。たとえば、ある商品開発のアイデアは自分が生み出したという物語を生きている人に、部下のアイデアの重要性をいきなりぶつけるわけにはいかない。そうではなく、部下に対する高い指導力という新しい物語を用意しながら部下の貢献を聞き取るべきであろう。事実は物語と物語の間に在る。

第三に、速記録の公開をめぐる難しさがあげられる。ヒアリング調査が成功し大満足でテープおこしを終えた後、修正段階で速記録が大幅削除されてしまったことが何回かある。語り手が慎重になるのは仕方がなく、元の所属組織を気遣って公開を躊躇することも多いが、聴き手も不安を煽らぬように慎重に交渉する必要がある。ヒアリング中は聞くことに熱中してしまうが、後に公開というハードルが控えていることを忘れてはならない。貴重な証言もあまりにも貴重だと言われれば、相手も慎重になるものである。なお、ヒアリング調査終了後の修正→編集→印刷配布は、時間も労力もお金もかかることも補足しておく。印刷費も含めて計画をしなければカセットテープだけが増えるという結果になってしまうので、計画性は大切である。オーラルヒストリーの調査者は営業担当であり、なおかつ自営業主なのである。

以上要するに、オーラルヒストリーは語り手と聴き手の関係性を理解し、なおかつその関係性に関与しなければならないといえる。この関係性に対する理解と関与はケースバイケースで対処するしかないが、調査経験によってその判断力が増すことは確かである。私自身は、ベテラン調査者と一緒のヒアリングに参加し、徐々にやり方を覚えた。また、調査終了後に調査仲間と行う反省会も意外と役に立った。質問と答えのやりとりを振り返り、別の質問の仕方を再検討することでヒアリング調査のやり方を改良した。

5 調査者と利用者のネットワーク

本稿の目的は、私自身のオーラルヒストリー経験を伝えることであった。オーラルヒストリー研

究には経験のネットワークが求められている。それは、調査者を増やし、お互いが連携するだけではない。オーラルヒストリーの分析は、自分が行ったヒアリングだけでは完結できないのだから、ここで言う連携とは調査者同士だけではなく、調査者と史料利用者の連携も含まれる。

伊藤（2007）や吉田（2007）が指摘するように、オーラルヒストリーのデータベース化やセンター設立も求められているが、そのセンターは、オーラルヒストリーを集めて整理するだけでは不十分であろう。アンケート調査ならば、調査の手続きがわかりやすく、個々の質問の目的も明確であるので、他人が行った調査を利用することも容易であるが、オーラルヒストリーの利用は注意を要する。すなわち、史料の利用者は、語り手の証言を読むだけではなく、聴き手と語り手の対話という文脈に注意しながら読み解かねばならない。すなわち、証言の文脈性を理解しなければ、適切な解釈に辿り着かないのである。

私は、オーラルヒストリー解題研究会を開催し、様々なオーラルヒストリーの解釈可能性を検討した。その内容は、『オーラルメソッドによる政策の基礎研究 研究成果報告書【別冊1 解題集】』（政策研究大学院大学2005年）に収められている。自ら作成したオーラルヒストリーが同分野の研究者たちによって建設的に批判・解釈されることは、自分自身の研究関心を広げてくれる良い経験であった。また私も、今後この史料を利用してもらえる可能性の高い人たちに調査の目的やヒアリングの苦勞を話した。

このようなオーラルヒストリーの解題研究会が持続的に続けられるべきだと思う。さらに解題研究会に参加された人の中から自分自身でオーラルヒストリー史料を作成しようと希望される仲間が増えたならば、これほど心強いことはない。

（うめざき・おさむ 法政大学キャリアデザイン学部准教授）

【参考文献】

- 石田光男（1990）『賃金の社会科学』中央経済社
- 伊藤隆（2000）「内政史研究会の解散」『近代日本の人物と史料』青史出版
- （2007）「歴史研究とオーラルヒストリー」『大原社会問題研究所雑誌』第585号pp.1-10
- 梅崎修・青木宏之・杉山裕（2007）「鉄鋼大手企業における賃金プロフィールの接近：1960、70年代—内部労働市場と産別賃金交渉—」『日本労働研究雑誌』No.548 特別号pp.17-30
- 江頭説子（2007）「社会学とオーラル・ヒストリー」『大原社会問題研究所雑誌』第585号pp.11-32
- 河西宏祐（2001）『電産型賃金の世界—その形成と歴史的意義（新装版）』早稲田大学出版会
- （2007）『電産の興亡（一九四六～一九五六）』早稲田大学出版会
- 鈴木良治（1994）『日本的生産システムと企業社会』北海道大学図書刊行会
- 竹前栄治（1982）『戦後労働改革—GHQ労働政策史』東京大学出版会
- 南雲智映・梅崎修（2007）「職員・工員身分差の撤廃に至る交渉過程—「経営協議会」史料（1945～1947年）の分析—」『日本労働研究雑誌』No.550 pp.119-135
- 南雲智映・島西智輝・梅崎修（2006）「地域別統一労働協約締結に至る労使交渉過程（1961～1970）—東京金属産業労働組合の事例—」『日本労働研究雑誌』No.548 特別号 pp.105-124
- 御厨貴（2002）『オーラル・ヒストリー—現代史のための口述記録』中央公論新社
- 森直子・島西智輝・梅崎修（2007）「日本生産性本部による海外視察団の運営と効果—海外視察体験の意味—」『企業家研究フォーラム』第4号 pp.39-55

吉田健二 (2007) 「大原社会問題研究所のオーラル・ヒストリー」『大原社会問題研究所雑誌』第585号 pp.33-56

Thompson,Paul.(2000)The Voice of the Past:Oral History 3rd Edition,Oxford University Press (2002) 酒井順子訳『記憶から歴史へーオーラルヒストリーの世界』青木書店

Thompson,Paul.(2003) 「オーラルヒストリーの可能性と日本との関連」『三田学会雑誌』第96巻第3号 pp.17-40

<p>CFSI(蓄積的疲労徴候インデックス)マニユアル 労働と健康の調和 越河六郎 著 藤井 竜 著</p> <p>健康は各個人の問題ではあるが、職場の健康管理というときには、当該職場の組織制度や労働との関連をより直接的にとりあげるべきだと考える。予防的視点とはまさにこのことであり、広く労務管理の段階でもある。さしあたって、職場の様子を調べる必要がある。CFSI(蓄積的疲労徴候インデックス)は、その一つのスケールとして作成したものであるが、出来合いのものとしてではない使用方の検証のために長い期間を要した。</p> <p>A5・286頁/3,990円</p>	<p>産業保健専門職のための 生涯教育ガイド ―付録・日本産業衛生学会 産業保健専門職倫理指針― 日本産業衛生学会 生涯教育委員会 編</p> <p>A5判・113頁・5000円</p> <p>国際的にも大きな転換期にある産業保健業務。企業経営と一体となった労使によるマネジメントシステムの取り組みが求められる。新時代にふさわしい産業医、産業看護職、産業衛生関連技術の生涯研修の内容を一六ステップでわかりやすく示したガイドライン。</p>	<p>心理学の理解 井上枝一郎 編</p> <p>A5・300頁/2310円</p> <p>心理学をこれから学ぼうとする人のための入門書 主要目次：心理学の概観／情報の受容と認識／人の情報処理／知識の構造／環境と行動／発達を知る／個人の内面の世界／人間相互の関係／ヒューマンエラーの話／暮らしと職場の心理学／心理学からのアドバイス</p>
<p>財団法人 労働科学研究所出版部 〒216-8501 神奈川県川崎市宮前区菅生2-8-14 TEL 044-977-2125 FAX 044-976-8190 E-mail : shuppan@isl.or.jp URL : http://www.isl.or.jp/ (価格は税込)</p>		